

小野小町

—江戸後期における小町信仰の中に見られる小町像—

黒羽友子（国際武道大学）

kurobane@budou-u. ac. jp

【要約】

その名は日本人であれば誰もが知る日本の美女の一人、小野小町は「はなのいろはうつりにけないたつらにわかみよにふるなかめせしまに」の歌とともに、日本の王朝文化を代表する六歌仙の一人であった。しかしその実像は出自をはじめとして不明とされているところが多い謎の女性である。それが江戸末期 1700 年代から 1800 年代にかけて、小町信仰として全国的に浸透していくのである。

幕末期から、明治にかけて全国的な教団として発達していった金光教、天理教等の信仰集団とはことなり、一つ一つの村、一つ寺の中だけで信仰が維持されていった。この信仰を支えていったものが何かを探る手がかりの一つが流布本「小町集」にあると考える。

1. はじめに

筆者が小町に関心をもった契機は、京丹後にある小町開基の寺、曹洞宗『妙性寺』を通りがかりに偶然見つけてからである。小さな村、寺ではあるが、天井絵、伽藍等ずいぶん立派なものであった。観光客も産業も期待できないであろう小さな村の中で、この小町信仰は江戸時代から途絶えることなく現在までまもられてきた。近くには平安時代から有名な成相寺などがある。なにがこの村の中で小町信仰を守らせてきたのだろうか。なにがこの寒村ともいえる村の小さな寺を 300 年近くも守らせてきたのだろうか。

2. 小町信仰に関して

現在、日本全国に小町に関する伝承地とされるものは 90 カ所近くにのぼる。生誕地、雨乞い伝承、参詣寺社、死亡地とされるものなど様々であるが、小町の開基寺院と伝えられるものも三カ所ある。いずれも、1700 年代から 1800 年代、江戸末期にかけてのものが多くといえる。それぞれの村で小町信仰とされるものは薬師如来による疱瘡や眼病等への救済目的であったとされる。（宮津市「曹洞宗智源寺所有資料」）薬師如来信仰は勿論光明皇后の時代に遡る信仰であるが、現在の資料では、皮膚病として疱瘡、眼病等の治癒が祈願されたとされている。薬師如来信仰にもとづく唱導歌「・・・ここにその蓑笠脱ぎおけ」も小町信仰のいくつかの伝承地で伝えられている。疱瘡を患った小町の満願成就に薬師如来が、この歌とともにあらわれたということである。小町信仰と皮膚病の関係はいつも言われることである。しかし、その実態は癩病と梅毒が大きかったと考えるべきである。現実には癩病が当時としては、最も多くの人々が苦しんだ病気の一つである。明川氏によると癩病にかかると自ら家族・故郷を捨てて比丘尼や巡礼の姿をして、死ぬまで放浪を続けるといわれている。（明川 2007）癩病という言葉は近年の諸事情によって意図的に消されたと考えられる。

2-1. 伝説の中の小町

また、小町伝説として、今に語り継がれるものが多数ある。有名な深草少将の百夜通い、穴目伝説、放浪伝説、醜い奪衣婆像ともいわれるその老衰像等、更に伊勢物語や大和物語などにみられる、色好みで驕慢な小町である。冷泉家文書では、小野貞樹と結婚、普通に孫までいる小町でもあるが、それはあまり流布されなかった。『玉造小町子壮衰書』の影響であろうか、とにかく小町は、驕慢で、没落し、放浪、醜い老婆になり、貧しさと孤独の中で亡くならなければならなかったようである。(黒岩1994)

能では七小町(通小町、卒塔婆小町、草紙洗小町、関寺小町、清水小町、雨乞小町、鸚鵡小町)が語り継がれ、歌舞伎や絵草子の題材としても700年の間、庶民文化の中に息づいていた。清水小町は歌舞伎の絵草子が残り、いかに庶民文化として享受されてきたかをうかがい知ることができる。ただ、能の中の「関寺小町」は各能の流派の中でも最高位のものであり、若くして演じることはもとより、たとえ能役者が高齢であっても、さらにその上のものを求められ、長く演じられることがなかった。各流派に於いて、関寺小町は能の世界で極められなければ演じることはならないものとして求められているものがある。

私見ではあるが、後述する「はなのいろはうつりにけりな……」の歌のなかにある真髓ともいえる部分、時間的空間的存在から解き放たれた自己的存在を、「関寺の鐘の音」と同時に、顕在化させなければならぬのであろう。

『玉造小町子壮衰書』や多数の伝説に見られる、放浪と落魄の小町の世界と仏教的要素あるいは仏教的教化に用いられた小町のみではなく、さらに深いものが流布本「小町集」の中には詠み込まれているのではないかと考える。また小町信仰にすぎない村人の心も、ここの流布本「小町集」の中に己の心として見つけたのではないかと考える。

3. 曹洞宗小野派妙性寺に伝わる『妙性寺縁起』と、田崎家に存在する『小野小町姫』伝承

伝承には二つ、妙性寺に存在する巻物と、小町姫を看病し、墓を作ったとする田崎家に存在する巻物、椀、化粧道具などが存在する。

この「妙性寺」という小さな寺は京都府京丹後市大宮町に存在する。小町開基の寺として『妙性寺縁起』が存在している。この縁起には妙性寺三世雲騰眠龍の名と文化暦中(1804~1818年)という年代が記されている。この寺には伝小野小町墓、薬師堂、「小野妙性大姉」石碑及び位牌、また伝小野小町坐像がある。伝小野小町坐像は、江戸期の制作であり、若く美しい比丘尼像である。

もう一方の伝承として存在する「『小野小町姫』(田崎家所蔵)も『妙性寺縁起』と筆跡等などから、『妙性寺縁起』と同じ雲騰眠龍によって書かれたものと考えられている。

伝承内容は、晩年小町が京都から成相寺(704年開基)参詣を目指して旅をした。成相寺は日本三景の一つとして知られている天の橋立にあり、平安期から貴族や庶民の信仰を集めていた。小町は、途中で宮津に近い五十日村に足をとめた。それは、五十日村で、火事が多いので祈願を依頼されたからである。「日」の字を「河」に変えて、火事を鎮め、難産も治めた。小町がさらに旅にしようとしたところ、病気になり辞世の句を残して亡くなった。妙法寺住職と村人により、薬師如来を祀る薬師堂と小町を開基とする妙性寺を建立した。それから少しして、京都から深草少将が訪れ、この地で亡くなったので「岡の宮」を建てたというのが、この地の伝承である。火

事を納めたことと、安産祈願は、薬師如来信仰の多くが、皮膚病、眼病への祈願が多かったという点で異なりがある。雨乞いはあるが、火事を治めたという伝承は日本全国で五十河だけである。しかし、実際にこの地を訪れると、村人の信仰の対象は、火事を鎮めたという霊験のある小町だけではない。さらに皮膚病と眼病への霊験を求める薬師堂の存在があった。その霊験は眼病と皮膚病が記され、治癒祈願であったことがうかがえる。言霊を扱う巫女的な存在としての小町と、皮膚病・眼病に霊験のある薬師如来信仰がすでに、この地に知られていたことは十分に考えられるが、地元の村人がなぜこの自称小町姫という比丘尼を、開基として寺を建立したかである。比丘尼がこの地で亡くなったという機縁だけであろうか。

全国的に、小町の薬師如来信仰は皮膚病と眼病が多く見られる。皮膚病として、現在は疱瘡が記されているが、数少ないが「癩病」も表記されている。この「癩病」が実は小町信仰の原点だと指摘しているのが明川氏である。（明川2007「小町伝説の伝承世界」）疱瘡は確かに死につながる病気であるが治癒することもある。しかし、癩病は治癒することがなく、時間的に非常に進行の遅い病気である。大谷吉継という武将が癩病でいつも頭巾をまとい、馬に乗ることもできないので、輿に乗って関ヶ原の戦いに参戦したという逸話がある。この逸話で気が付くのは、癩病者も病気の進行が進むまでは、家族とともに生活できていたということである。癩病は、時には遺伝とも考えられていたともいわれ、伝染病というよりは、治癒する見込みのない業病として考えられていた。そして現在からは想像のつかないほど、もっと身近に多くの罹患者がいる病気であった。

全国の小町信仰は、この自称小町という女性、熊野比丘尼ともいわれるときもあるが、様々な比丘尼の活躍を機縁として各地で伝えられていったといわれる。

通常、比丘尼は絵解きなどを通じて、庶民に仏教的地獄、極楽などを教え、唱導していく女性であった。当時の比丘尼が用いた仏教の唱導歌を見ると、儒教に基づく女性観もすでに存在し、流布本「小町集」に見られる女性観とはかなり異なる様相である。

比丘尼の教化活動は女性の職業集団とも考えることができるほど、多種多彩であった。文献によっては、ほぼ遊び女と同様の場合もあった。しかし、唱導僧とともに、仏教の教化活動での活躍は大きかった。光明皇后にも由来する薬師如来信仰が、救済を信条として、1000年以上も伝えられたということも、比丘尼の教化活動を支える一つの要素として重要であったと考えられる。仏教的教化としての比丘尼の活動で有名なものは、地獄・極楽の絵説きで銭をもらい、その日の生活をひさぐというものであった。

疱瘡などの伝染病に罹患すれば、村からは隔離されるであろうが、治癒すればまた村に、あるいは家族のもとに帰ることができる。一方癩病の場合、すぐに放浪生活が始まるとは思えない。まず伝染病と考えられていたかどうか疑問で、遺伝的病気と考えられていたということからも、見た目にも症状が進行するまでは家族とともに生活できたであろうと考える。薬師如来にすがり、家族で助け合い、そして地区でも助けるが、正視に堪えないほど病気が進行してきたとき、放浪あるいは隔離が考えられる。時間的経過が十分にあり、その家族を支えていくところに比丘尼の救済があったとしても不思議ではない。癩病者や家族の苦悩は時間をかけて進んでいき、それを支えていくのが薬師如来信仰である。

明川氏によれば路銀をもらって放浪生活をせざるをえなかったとあるが、同時に家族の近くで

隔離することもあったのではないかと思われる。また、人情的には他地区から、放浪してくる病者を滞在させる小屋も存在したのではないだろうか。宮城県の小町信仰のあった地区では、放浪してきた小町が、清流の近くに建てられた小屋に滞在している。このような小屋が民俗学的には存在していたと言われているのかどうかは、自身の研究不足で不明である。しかし、人の心を考えると存在していても不思議ではない。自称小町姫という比丘尼を滞在させ、面倒をみた上田家もそのような、放浪者を一時的に滞在させることができる場所、たとえそれが炭焼き小屋のようなものでも、人が夜露をしのげる場所を所有していたのではないかと考える。村人に守られた小さな『妙性寺』は、このような病者、あるいは誰も看取る人のいない死に瀕する人々の存在と無関係であったとは考えられない。

4. 小町集

流布本『群書類従本「小町集」』（昭和9）は、文献としてはあまり評判がよくない。その大きな理由の一つが、小町集 116 首の中に小町の歌以外のものも少なからず存在し、小町の真歌かどうか長い間検討され、そのことに力がそそがれてきたということも理由の一つである。また、重複している歌がある。更に群書類従そのものに対する資料としての疑問、詞書の変化が、編者の意図により「小説化」しているのではないかという疑問などを呼び起こし、ますますその評価を下げてきたところがある。（片桐1975）しかし、だからこそ江戸後期の小町信仰の背景を理解するには意味のある文献であると考えられる。

『古今和歌集仮名序』では、「小野小町は、古の衣通姫の流れなり。あはれなるようにて、つよからず。いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。つよからぬは女の歌なるべし。」という紀貫之の評があり、この評が、長く小町の歌への評価の基幹をなしていたといえる。「・・よき女のなやめるところあるに・・」というこの評から小町の歌は、常に研究されてきていたともいえる。しかし、本当に江戸時代後期に編纂された小町の歌の心はそこからだけのものだろうか。流布本「小町集」に見られる小町像と、この紀貫之の小町像との矛盾が、流布本「小町集」の評価を下げていた一因ともいえる。

4-1. 流布本『群書類従「小町集」』から

いくつかの歌を取り上げ、歌に見られる小町の心について考えてみたい。小町の歌は一連の「夢」「秋の月」「憂きと浮き」「海人と海松目」など多くの掛詞と縁語、男女間への鋭い観察眼などが常に取り上げられてきた。（大塚2011、片桐1975、窪田昭和33）しかし、小町の歌の心は歌としての美しさや、機知にとんだ歌としてのすばらしさだけではなく、人本来の「ありのままの姿」で、現世を生き抜くというところにあるのではないか。この「ありのままの姿」というのは、今ディズニーの映画で多くの人に感動を与えている歌からヒントをえた。誰もが認める美女、奪衣婆、癩病で崩れた容姿、姫君と呼ばれる高貴な存在、放浪する乞食、この誰にも等しくあるのが、今生きている自分であり、小町自身の心である。

流布本系『群書類従「小町集」』116首を全解釈されてきたものは意外に少なかった。しかし、2009年発表された角田氏の研究によって、やっと小町集の心をさらにふかく知ることができると考える。（角田2009）

(1) はなをなかめて

「花のいろはうつりにけりないたつらにわかみよにふるとなかめせしまに」の歌はあまりにも有名であり、多くの人がそれぞれに理解し、それぞれの心の世界から自分の言葉で説明しようとする。また誰もが、自分の心におきかえてこの歌を堪能できるのである。角田氏の指摘が非常に鋭く指摘されておられるが、「春雨によって打ち破られたのが詠者経世の時間空間そのものであった故に、」誰もが自分の心におくことができるのである。この歌によって打ち破られるのは、この歌を知った人の多くがその自己の経てきた時間空間を打ち破られるのである。そして時間空間というカテゴリーからときはなられた自分を見つけることができる。それがこの歌が1000年経ても、また新しく人の心に響く理由であろう。また、「能の中で、「関寺小町」が極められたものとして言われる所以でもあるかと思う。

(2) まえわたりし人にたれともなくたとらせたりし

「そらをゆく月のひかりをくもみよりみてややみよにてよははてぬへき」

「よははてぬへき」は、平安時代の王朝文化の中では、男女の恋の中が終わることを言っていると考えられるが、男女の間のことだけを意味していると考えだけではなく、もっと大きく、詠む人の人生とも考えられるのではないか。「闇」は自分をとりまく世界である。「月の光」は、以前に恋人であった男の輝かしい姿であると考えられる。この「見てややみにて」の助詞「や」について、角田氏は非常に鋭い指摘をされている。少し長い引用する。「や」による自問は、与えられた自らの幸福の分量や、定められた自らの命を悟るかのような強さをもっているの指摘である。「小町集」という私家集には、仏教思想も浄土への憧れも何も見えないのに、天に人生を任そうとする人間の姿がここにも描かれている。(角田2009)

比丘尼は、仏教的教化を目的とした救済活動であったが、小町集116首の中には、仏教的要素がほとんど見られない。また、古今和歌集から採首された一連の夢の歌などから、恋に関する歌として理解されることが多い小町歌であるが、筆者は小町の歌の心は恋の歌に留まらず、「生きる」ことを真摯に詠みあげたものと考察する。それが、皮膚病、即ち治癒することのない癩病者に、現世で生きることを摂理として受け入れさせ、生き抜くことを決意させるのである。。

(3) 「花咲てみならぬものはわたつ海のかさしにさせる沖つしら浪」

これは「小町集」の116番、最後の歌である。あまり取り上げられることのない歌であるが、これを最後にもってきた編者の意図を感じる。『後撰修』では「海のほとりにて、これかれせうえし侍りけるついでに」の詞書がある。この詞書では幾人かで海のほとりを逍遙していたついでにということになる。群書類従の編者がこの詞書を記さなかったことは意図的であったと考える。小町信仰を支えるその思想的背景にあるのは、壮絶な孤独である。この詞書なくして、歌だけを見たとき、そこには、煌々とした月の光に照らされる海に対峙する己れを見ることであった。「花咲てみならぬもの」は、家族を持てなった、あるいは子供がいなかったなどということではなく、家族があっても、こどもがあっても、結局は自分一人という壮絶な孤独の中にある自分である。そしてその自分は海の神様の髪を飾るあの沖の方につきの光りに照らされる簪のようなものである。

この壮絶な孤独感をこの歌の中に見るには詞書は不要であった。

角田氏はこの116番目の最後の解釈に、弱さとその美について述べておられたが、それは王朝文化の担い手としての小町像であり、江戸末期の小町信仰の村人が見た小町は、壮絶な孤独と、すべての結果の中で生きるという小町の姿であると考えられる。

4-2. 詞書に見られる変遷

(1) 女郎花をいとおほくほりてみるに

「なにしおへばなつかしみをみなえしおられにけりな我か名たてに」

詞書の「ほりて」が異本系統（「神宮文庫蔵本」等）では「を（お）りて」となっている。「折りて」の方が古いが、69首本には存在していない。後になって「小町集」に記されたと推測されている（角田2009）が、この「折りて」と「掘りて」では、後者の方が意味が深く感じられる。「掘る」は根こそぎ採られたというか、そのひどさを感じざるを得ない。

(2) めのとのとをきところにあるに

「よそこそみねのしらくもとおもひしにふたりかなかにはやたちにけり」

この歌は『新千載和歌集』では、「題知らず」として、という恋歌として採録されている。

小町歌を恋とからめないで、めのとという家族ともいべき人への想いを詠んだという理解は、小町歌が恋人ばかりではなく、人の心を詠んだものだという理解へ発展していったからであると考えられる。

(3) ひととのいふいとてあけしつとめてかはかりなかき夜になにことを

夜もすからわひあかしつるそとあいなうとかめて人に

「あきのよもなのみなりけりあひとあへばことそともなくあけぬるものを」

この歌は『古今集』にも採録されているが詞書はない。この詞書が加えられたことにより、角田氏は「小町の歌は逆説的な物言いとなり、夢に酔わない小町の姿が、形づくられているのを感じる」（角田2009）ここにも、小町の歌の背景の変化として、小町の歌の心を理解する江戸末期の人々の心を反映しているものと考えられる。

(4) 中たえたるおとこのしのひてきてかくれてみけるに月のいとあはれなるを見てねむこと こそいとくちおしけれとすのこになかむればおとこいむなるものをといへば

「ひとりねのわひしきままにおきみつづ月をあはれといみそかねつる」

『後撰集』の詞書では「月をあはれと言ふは忌むなり」と言ふ人のありければと簡単である。角田氏によれば「静嘉堂文庫蔵本」のみ「ひとりゐのさびしきままに」とするがほとんど「わびし」である。詠者は「さびし」といわず「わびし」となっている。「わびし」は詠者が自分のやるかた方ない沈潜していく心を詠んでいるとされている。（角田2009）詞書の変遷が群書類従本「小町集」の編者の意図していたことを決めつけることはできないが、700年の間、小町の歌の心への理解の変遷が繰り返されてきたことを物語っていると考えることはできるであろう。

5. まとめ

流布本『群書類従「小町集」』の評価は、熊野比丘尼等による、薬師如来による救済を目的とした活動に大きく依拠しながらも、その救済対象が癩病者などの壮絶な孤独感、絶望感、からの救済であったため、仏教的要素よりも「ありのまま生きる」という、小町集に流れる心に、人がその心を重ねてきたところにあるといえるのではないか。王朝文学として華やかな世界で伝えられてきた小町集が、700年をかけてその心を明らかにしてきたと考える。「世俗の憂き」の論点からのみその心を知る、あるいは仏教的無常観として論じることで、この歌の心が十分理解されたとはいえない。一人の人間の壮絶な孤独とすべてをそのまま結果として受け入れて生きてい

く中に、この歌の心が重なっていくのではないかと思う。この歌の心は、本来小町の歌の中には存在していたものであると考える。それは、小町自身が意識していたものではなく、彼女自身が直感的に、己の生の中に認識したものであるかもしれない。また多くの比丘尼が小町を自称したことは、小町の歌の中に自己の姿を見いだし、心を重ねたからと考える。彼らの間では、救済という名のもとに、共にその歌の心の中に、自分たちが存在する、あるいは生きるということであったのではないか。

山また山という奥深い寒村の中のわずかな檀家数のもとに妙性寺という小さな小町信仰の寺が300年を過ぎても守られてきた理由が、仏教的浄土思想や無常観による救いではなく、小町集の歌の心の中にもともに生きる自分の姿をみたからではないだろうか。

参考文献・資料

- 明川忠夫『小町伝説の伝承世界』勉学社2007
大塚英子著『古今集小町歌生成原論』笠間書院2011
片桐洋一著『小野小町追跡』「笠間選書36」笠間書院昭和30
窪田空穂校註『和泉式部集・小野小町集』（「日本古典全書」）昭和33
黒岩涙香著『小野小町論』社会思想社1994
恋田知子著『仏と女の室町 物語草子論』笠間書院2008
小林茂美著「小野小町攷攷」桜楓社昭和57
角田宏子著『小町集の研究』和歌書院2009
栞尾武著『玉造小町子壮衰書』「岩波講座日本文学と仏教 第4巻無常」
岩波書店1994
錦仁著『浮遊する小野小町』笠間書院2001
塙保己一著『群書類従 第15輯 和歌部』続群書類従完成会 昭和58
塙保己一著『群書類従 第16輯 和歌部』続群書類従完成会 昭和9

資料：

- 『全国の小野小町伝承地資料』 京丹後市大宮町及び曹洞宗智源寺保存
『妙性寺縁起』 宮津市曹洞宗智源寺保存
『小野小町姫』 田崎家保存